

UDLM

2

vol.328

February 28th
2023

そこに必ず泉あり

- p.2-7 指導教員と振り返る
2022 年度の修論・卒制
- p.8-11 新・特任助教 青木公隆先生を知る
- p.12 青木先生に聞いた
デザ研の学生から 10 の質問！

▲ 14 号館 10 階のベランダからの景色

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

指導教員と振り返る、2022年度の修士論文・卒業設計

今年度も1月末に修士論文、2月上旬に卒業設計の提出と審査が行われ、都市デザイン研究室からは6名の修士2年生と3名の学部4年生が発表を行った。そこで今回の研究室マガジンでは、本研究室の指導教員である宮城先生・中島先生・永野先生・青木先生とzoom上で座談会を開催し、今年度の卒業設計・修士論文についての講評をいただいた。

本章は、修士論文・卒業設計を提出した個人に対する講評という形でいただいたお話ではあるが、都市に関心のある全ての人にとって示唆に富んだ内容となっている。興味のある執筆者・設計者についての講評だけでも、是非読んでいただけたら幸いである。

(青木先生は「SECTION2:卒業設計」のみの参加、聞き手:M1 長谷川・平野)

SECTION1：修士論文



神谷南帆さんの修士論文

中島 都市を構成するその一つ一つの建築単位まで捉えながらその変容やメカニズムを見ていくのは、都市計画の研究だと実は最近では少なくて、地区や都市スケールで数値化する研究が多い。都市の基本単位として敷地や建築の動態を明らかにすることは非常に大事なことで、ちょうど**建築と都市計画との間のスケール**として、それらを繋ぐような部分をしっかり考えている、都市デザインの王道的な研究だったと思います。

宮城 ものすごく丁寧でしたよね。彼女のその細やかな感覚は、就職をして仕事に向き合ったときに他の人とは違うものを生み出してくれるかもしれないという期待を抱きました。

小さな建物の小さな断面や立面、そんなスケールから街を見る姿勢

永野 彼女は小さなものへの眼差しが一貫していました。小さな建物の小さな断面・立面など、小さなスケールで街を見ることができると自体が大事な能力だと思うので、それは今後も継続してほしいです。都市において断面を扱ううえでは建物の中外を一体で見るのがポイントだと思うのですが、この研究ではあまり建物の中に入らなかったで、今後は**建物の中をより想像するような心掛け**を持つと更に良くなると思います。



合田智揮さんの修士論文

永野 単純な空間構造だけではなく、社会構造との関連で見てこそ地域理解だ、という姿勢・メッセージが非常に良かったし、しっかりできていたのではないかと思います。土地・上物・そこに暮らす人々とレイヤーを分け、関連性を考察するアプローチは、特にこの数年で研究室としての蓄積もできてきているように感じます。

地元の方々にとっても、非常に有益な論文になったと思うので、地域に還元して欲しいです。

宮城 割とテーマがあっちに行ったりこっち行ったりしましたよね。最終的なテーマに行き着くまでの途上で色んな所を寄り道していたからこそ、このテーマに行き着けたのだと思います。

中島 **歴史研究**は史料の存在が絶対条件なので、彼のようにその有無によって論文の具体的な主題が変わるのはよくあるプロセスだと思います。都市形成史の研究史としては、元々空間史や景観史、計画史が先行し、それだけでは表層的なのでその背景にある仕組みを解くために土地所有を介した社会経済史が導入されてきたのですが、逆にこのような**土地所有の歴史**を出発点として、そこからもう一度、空間や景観の歴史がどう描けるかをもっと考えたいと思われた良い論文でした。



杉本莉菜さんの修士論文

中島 **グリーンフラ、エコロジカルネットワーク**など今正に多くの人が関心を持っているテーマを、都市空間の歴史的な変遷という私たちの研究室がずっとやってきたことと重ね合わせながら解き明かし、現代にもある種のヒントを与える興味深い事例を取り上げることで、都市デザイン論としても成立させた点、非常に高く評価しています。

宮城 **水**は今色んな意味で、ものすごく大事な媒体ですよね。それぞれの持つ歴史的経緯も改変具合も全然違うし、自然と人工のレベルも全然違うものが、大都市でモザイク状になっている。それを繋ぐための媒体として水が持つポテンシャルにきちんと着目することが大事だと思います。

永野 確かに地下には人工的な水資源も沢山あり大規模開発ではそれらを都市環境に接続することを考えられていないと思います。苑池を通じて示してくれた、水により地中と地上をコネクトする操作は、かなり汎用性のある示唆だと思います。素晴らしい成果でしたが、本人はとても苦しんだというか、去年の夏ぐらいまでなかなか先が見えていない感じでした。秋以降、一気にプレイクスルーしたわけで、今M1で研究に苦労してる人もまだまだ先を信じて頑張りましょう。



若松風人さんの修士論文

宮城 **地主**というものは、ある特殊な条件が整ったときに成果として凄く豊かなものを作ってくれる。あるいはまだそれが生かされていないものでも、そういった選択肢があるということを示してくれた価値はとても大きかったと思います。

永野 「第二の代官山ヒルサイドテラスはなぜ出てこないのか」という彼自身の問題意識に立脚しているからこそ、この研究がより生き生きして見える気がしています。

中島 地主単位で見てみたときに都市がどういう風に構成されていて、それらの地主たちがどういうことを考えて行動しているのかを突き詰めて考える研究が、現代の都市を考えるうえで非常に大事だとこの研究を見て改めて感じました。この研究は引き継ぎたいと思いますね。土地の形成史は既に結構あるのですが、土地を持っている現代の地主、つまり「人」に関心を集中させて都市を読み解いてくというアプローチは面白い研究テーマを見つけてくれたなという印象を持っています。



渡邊大祐さんの修士論文

永野 **エコトーン**は、改変されないに越したことはないとなりがちですが、そもそも二次的自然であるからには、変化と関与も大切です。被災・復興を追ったからこそ、そこに迫れました。また、実態の報告に留まらず「複層的エコトーン」なる独自概念を打ち出してくれたことが良かった。やはり最後は、概念を提示してほしい。パッチワーク状のエコトーンもあり得るというこの概念は、手賀沼で応用させられそうな気がしています。

宮城 全部のエリアを図案化してみたことがすごく大きかったと思っていて、それが概念化への1つの入り口でもあると思います。彼はそこから更にいくつか立体的にエコトーンを表現していました、その際に彼の持つ表現力とうまく噛み合った感じがします。特に空間を扱う場合は、技能とし

て何の媒体を使うことができるかが、結構その後の研究の進展に重要なことのように思いました。

切ってみて断面として描かれたことで初めて見えてくるものがある

中島 見えているから切るというよりも、切ったその断面として描かれたことで初めて見えてくるものがあるということが、この研究ではっきりしたと思います。常に断面を切ってみる癖や思考を大事にしたいなと、改めて思いました。



劉嘉林さんの修士論文

都市の中の小さくて見落としがちなものから、都市のあり方を議論する力

中島 屋敷神は都市の中の特異点だけでも、どこにでもある身近な現象でもあって、つい見落としがちなものなのですが、そういうものに着目して都市を議論するという観点は、私たちの研究室としては常に持っておきたいと思います。都市の中での機能的に自明できない部分への着目からその都市の歴史やこれからの都市のあり方みたいなものを議論できるということが私たちが持つる力の1つだと思っています。ただそれをどう社会的な意義に繋げるのが常に問われるので、自分中でその答えを見つけていく必要がありますね。

宮城 屋敷神は所謂宗教的なものというより、土俗的な信仰に近いもの。少なくともその地域の人は仏教や神道に関係なくそれなりの意識を持っていることがほとんどですよね。これから先、再開発などが起こったとしても何らかの形で残していく可能性があるので、多様な都市の空間変容の中での一つの小さなベンチマークになる可能性のある重要な要素だと思います。

永野 屋敷神の話聞いて以降、結構まちかどで見つけて嬉しくなったりしているのですが、こういう「感謝の都市空間」を意識することがこれから非常に大事だと感じています。劉さんは良い気づきを教えてくれたなと思っています。

修士論文の総評

宮城 私たち都市デザイン研究室は**具体的な対象**がみんなあって、そこに着眼する時点で、何か惹かれるものがあるんだと思います。皆さんそれはきちっと捉えて、そのことに肉白しようという意識が現れていたと思います。そういう意味で、抽象的なモデル論などではない。そこが決定的に都市工の他の研究室と比べた時の大きな違いだと思うので、この部分はしっかりと受け継いでいただきたいなと強く思った今年の修論でした。

ひとつのものを深く掘って沸いた泉が知として世の中を満たしてくれる

中島 私たちの研究室は事例研究だと言われる事がありますが、先にテーマや俯瞰的視野があり、それに基づく全体から事例を抽出して行う研究とは違い、そもそも最初に自分が関心を引かれた個別具体で固有性のある都市空間や環境があって、それをとにかく扱いたいということから始まる研究が多いです。対象をどう位置づけているのかは大事なことです。たった1つの事例から何が分かるのかと常に指摘されるわけで、その時に研究室で受け継がれてきた精神、足元を掘れば、泉が湧くを意識してほしいと思います。1つのものを深く掘っていけば、そこから泉が湧いて自然と広がっていくんです。最初から薄く広く見るのではなく、一つのこと、私たちで言えば一つのまちや地域に向き合い、徹底的に深く掘し下げていくことで初めて沸いてくる泉の方が、世の中の知を本当の意味で潤してくれるという話です。

10年、20年、50年後を見通し、まだ見えぬ課題を自ら提示する姿勢

都市計画の研究の多くは、いい意味で目の前で多くの人々が問題だと思っていることに向き合っている。そういった、既に共有されてる問題を解く人は必要なんだけど、もしかしたらまだ誰にも見えていない課題が結構あるんじゃないか、そしてそれは10年後、20年後、50年後にはすごく大きな課題になってくるんじゃないかというものを捕まえるという研究をやりたいというのは常に

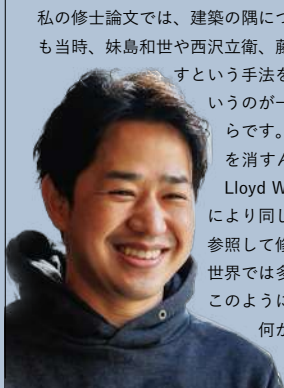
思っています。そういう研究は、研究テーマだけを見ると、キーワードとしてみんながすぐにぱっとわかる、時代性を表す流行言葉が入っていないなかったり、歴史的事象を扱っていたりすることが多いんですね。でもだからといって、時代遅れの研究とか、今の時代にリンクしていないということでは全くなくて、新しい問いを見つけたり、課題を提示するようなことを目指しているんだと思うのです。結果として時代性を見出しにくいタイトルやテーマになったとしても、その背景には、その先を見通す熱い思いが込められているといったんと思っていて、今年の修論の中にもそういうものがいくつか、確実にあったと思っています。そうした研究が結果としては、本当の意味で都市の今後を導いていくんじゃないかなと。時代と自分の研究とを短絡ではなく、過去と未来の両方に向かったより長い時間軸で接続してほしいです。それがその後の自分の仕事や生活を導いてくれる核のようなものになるので、これから書く人は、是非そういう視点で今年の6人の論文をレビューしたり、自分の研究テーマを構築して欲しいなと、毎年、この時期は思います。自分に言い聞かせているということでもあります。

永野 うちの研究室は同期が沢山いるのも強みのはずなので、是非バチバチやれるパートナーを見つけしてほしいです。せっかく熱くて優秀な者同士が集まっているはずだから、どんどん研究室に来て議論し合ってほしいし、そういう研究室でありたいと思っています。やっぱり手と足を動かすということが大事で、歩いて稼ぐか、図を描いて手で考えるかのどちらかは必ず早めに始めてほしいなと思っています。さあラストスパートという時期に、今更な作業を溜め込まないように、早めにしっかり手と足を動かしてほしい。それを厭わずにちゃんとできていた人は、最後までしっかり頭で考えて概念化等に専念するだけの下準備に至っていたということじゃないでしょうか。

ちなみに、12月ぐらいに杉本さんが「史料じゃ分からないからもう電話で水源ぜんぶ聞いてやる」とか言って庭園事務所総電話をしていましたが、それを見て私は何だか安心しました。私も脳筋と言われようが筋肉を動かして脳味噌に至るみたいところはやはり大事と思っています。修了生たちのそんな姿勢を見習いつつ、後に残るもの同士頑張りましょう。

青木先生×修士論文

私の修士論文では、建築の隅について研究を行いました。というのも当時、妹島和世や西沢立衛、藤本壮介などの若い建築家が隅を消すという手法を用い、ゆるくワンルームを作るというのが一種の流行りみちになっていたからです。それに対する「何で建築家って隅を消すんだらうという」疑問から、Frank Lloyd Wrightや、Mies van der Roheなどにより同じく隅のない建築が作られた歴史を参照して修士論文を書きました。デザインの世界では多くの場合、歴史が反復されるのでこのように歴史を参照しつつ、今の時代では何が言えるのかについてを考える論文が出てくると良いと思います。



永野先生×修士設計



当時はあまり思いませんでしたが、今振り返ると卒業制作と修士制作は繋がっています。それは、時間的に成熟した集合住宅や団地の更新に関するアンチテーゼです。団地再生では物足りないし、一斉建替えは寂しすぎる。その中間を探す試みでした。生きもので言えば、細胞は日々入れ替わって同じではなくなるけれど、人としては同一人物。建物など個々の要素の更新を通して、広場やストリートなど、他の要素が元気になり、最終的には身体全体(=街全体)が健康になるような、そんな細胞更新型の都市更新ができてこそ、自然環境的にも、そこに暮らしている人々の記憶としてもきっといいんじゃないかな。その心持ちは今も変わっていません。リノベーションの先にチャレンジし始めるべき時代だと感じているので、自分が関わらせていただいているフィールドで実践していきたいです。

路地空間における生活領域の変容と継承に関する研究 - 東京都台東区谷中を対象として -

神谷南帆 Naho KAMIYA

－論文の概要

住み手による能動的な働きかけが存在することを「路地性」と捉え、その継承に向けた手がかりを得るために住み手の意識が及ぶ範囲を示す路地の「生活領域」に着目し、変容を明らかにした。これまでの建物単体での議論に対し、路地単位で生活領域を捉え、それらを路地ごとに比較することで、その変容に路地自体の持つ特性（所有／相隣関係／接道状況等）が与える影響について考察を深めた。

－研究を通して得た学び・今後の展望

都市において人の生活自体が形作ったものの1つとして路地を扱った。建物単体で対応できない要求を補完するために使いこなされた路地は現代化に伴って各建物との関係が切り離された。このような都市空間への能動的な働きかけの減少は様々な場でみられるが、本研究を通して考えた、人側からの働きかけが存在する生きた風景の継承・創出は、今後実践の中でも考え続ける自身の課題としたい。



2つの路地における路地立面の経年変化の比較

－推しポイント

多様な要因が絡み合って生じる路地の変化に対し、地区全体の俯瞰から路地間の比較、そして建物単位の調査まで、スケールを横断した分析手法を設定できた。

－このテーマに行き着いた経緯

地域の方向けに卒論発表をした際に、変わり果ててしまった路地の様子を伺い、卒論では扱いきれなかった住環境について住民の方々と考えてみたいと思った。

伊香保温泉石段街の空間変容 - 大屋層の解体過程としての近代 -

合田智揮 Tomoki GODA

－論文の概要

伊香保温泉石段街を対象に、その主要な社会構造である大屋と門屋の支配関係の変遷に着目し、明期以降の大屋解体過程の詳述を試みた。史料調査から、当時大家が所有していた湯権・門屋・土地が、門屋→湯権 or 土地の順序で失われていく解体過程とそれに伴う石段街の空間構造の変容を記述し、温泉都市の空間変容の一パターンを明らかにした。

－研究を通して得た学び・今後の展望

歴史保全か何だと言われて久しいですが、どの町もいつの時代も、過去の歴史全てを背負い矛盾さ・ちぐはぐさを抱えて眼前にあることを思い知らされた気がしています。その点、敷地の市民活動を掘り切れなかったことは少し悔やまれます。短期的には4月からデベロッパーの一社員として働くうえでまちの歴史文化を尊重しつつ、長期的には群馬でまた活動する際に本研究が生きたら嬉しいです。



明治期の鳥瞰図と現在の写真

－推しポイント

資料収集。100年前の史料から当時の様相を想像する作業は、そもそも史料が残っていることが驚きですし、時の移ろいに思いを馳せるのが楽しかったです。

－このテーマに行き着いた経緯

当初はマルチな職能への興味から農学・林学者の都市計画への接近・職能の変遷を調べていたが、同時に地元を指向し、本多静六が携わった伊香保に着目した。

江戸・東京の歴史的苑池を介した水系の再生に関する研究

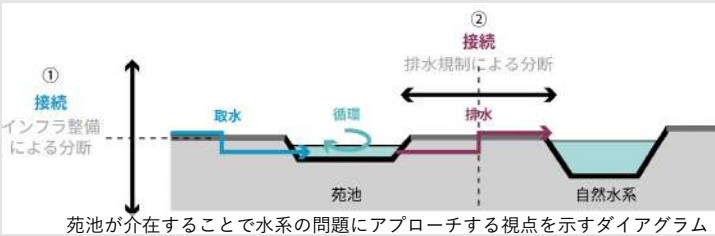
杉本莉菜 Rina SUGIMOTO

－論文の概要

江戸・東京に現存する苑池（：池泉を持つ敷地）の取水・排水システムと水系（：水の流れの系統の接続）の関係に着目した。苑池と水系の旧来の関係とその変化の実態から、水系をめぐる現状の課題とその根底にある問題を明らかにした。現地調査やヒアリングによる苑池事例の分析を通じて、苑池の担い得る役割を考察し苑池を通じた水系再生への視点および手法を提示した。

－研究を通して得た学び・今後の展望

設計とは180度違う、とははじめは思っていた。しかし実際に取り組んでみると、伝えたいことが伝わるように図を作ったり言葉の使い方や章立てを練ったり、「表現する」というプロセスの重要さは同じだと思った。そして、そこが一番面白かった。表現することは伝えるための手法／ツールであり、何に何を役も重要なスキルだと思う。伝えるための表現方法をもっと磨いていきたい。



苑池が介在することで水系の問題にアプローチする視点を示すダイアグラム

－推しポイント

ランドスケープの持つ「直接的に扱う範囲は僅かでも大きな自然環境の一部で、間接的にアプローチできる」という自分の好きな視点を表現できたこと。

－このテーマに行き着いた経緯

ランドスケープ×都市を大きなテーマとしたかった。自然基盤と都市インフラの両者の間にあるひとつの媒体として苑池が浮かび上がった。

地主によるオープンスペース接合型建築物群の整備に関する研究

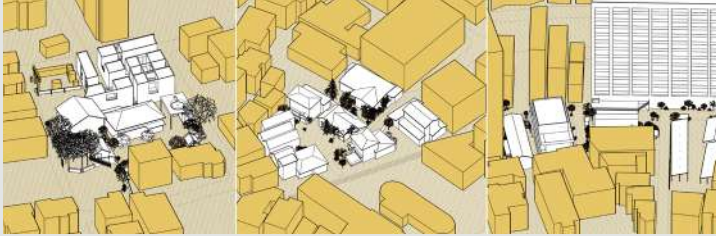
若松風人 Nanato WAKAMATSU

－論文の概要

近年、地主によって整備された3つのオープンスペース接合型建築物群を対象とし、その空間の特徴と地主による意思決定の特徴を明らかにすることを目的に、事例研究を行った。継承してきた土地とその風景を守るために手間を惜しまない地主たちの尽力によって、まちに開かれ、またまちの資源となりうる建築物群とオープンスペースが整備されていることが分かった。

－研究を通して得た学び・今後の展望

鋭い切り口の問いをたてること、構造的に調査を行うこと、そして得られた情報をもとに論を構築することを修士研究を通して学んだ。また調査を通して地主の方々の思いとそれを実現するための様々な工夫にも触れることができた。今後も都市をデザインするうえで活きる様々な技術や能力を磨きつつ、色んな思いを拾いそれらを都市空間に編み込んでいけるになりたい。



－推しポイント

今日のかつ局所的な研究対象とトピックを扱いつつ、古くから議論されてきた都市とそのデザインに関する普遍的な問いにもアプローチできたこと。

－このテーマに行き着いた経緯

「美しい風景とは何か、そしてそれはいかに創造可能か」という視点で都市をみたとき、オープンスペース接合型建築物群とそれを整備する地主に出会った。

東日本大震災被災地の汽水湖における水際の変容と環境防災機能の再生に関する研究 - 福島県相馬市松川浦の復興計画とその後 -

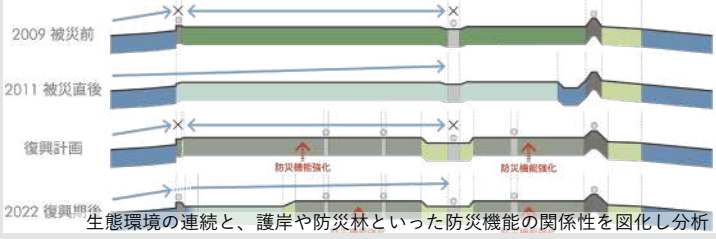
渡邊大祐 Daisuke WATANABE

－論文の概要

相馬市松川浦を対象として、被災前から復興期後における水際空間の変容を分析することで、変容の実態と、生態環境と防災機能の重なり合いの変化の様相を明らかにした。水際の中には「健全なエコトーンを保持する領域」、「護岸等により生態環境が分断される領域」だけではなく、防災機能と生態環境が入れ子状に重なり合う領域があることを発見し、それを「複層的エコトーン」と定義した。

－研究を通して得た学び・今後の展望

これまで対立的に扱われることの多かった環境保全と防災の中間を議論できたことです。それらは、自然発生したものではなく、被災環境の保全のため、急ピッチで進められる復興事業の中で、様々な関係者の議論の末に創出・保全された環境でした。現地の市民団体や専門家を始めとする方々の努力の結晶であり、そうした方々を少しでもお助けするべく、今後も関わり続けることを約束します。



生態環境の連続と、護岸や防災林といった防災機能の関係を図化し分析

－推しポイント

研究開始が遅れてしまい…兎にも角にも大量の図をつくることを意識して研究を進めました。ですので、論文をペラペラめくって図をご笑覧いただきたいです。

－このテーマに行き着いた経緯

汽水湖における被災前後の変容を分析する際に、水際が「生態環境の保全」と「水害対策のための人為的な改変」が対立する空間であったからです。

近郊集落の市街化がもたらす屋敷神の地域への表出に関する研究 - 武蔵村山市を対象として -

劉嘉林 Karin RYU

－論文の概要

東京近郊（武蔵村山市）を対象として、屋敷神とまちとの景観的つながりを研究した。過去の研究と比較して市街化や再開発が行われた街並の中で、屋敷神がどのように保存され、人々の生活と関わりを持っているのかを調査した。特に本来個人の敷地に収容されるはずの屋敷神がどのようにまちなかに表出し、景観に影響を与えているかに注目した。

－研究を通して得た学び・今後の展望

自分の足で全ての道という道を歩く経験を通して、地道に検証することを学んだ。本やインターネットで調べるのでもいいが、自分の目で見て確かめることには超えられないものがあると考えている。また、図による表現という新しい道具を使いこなすのが今後の目標である。それまでは文章で思考を表現していくことが中心だったので、今後は両者をうまく使いこなせるになりたい。



日本各地の屋敷林

－推しポイント

本研究を通して屋敷神を知った人には、ぜひ普段歩くまち角にも目を向け屋敷神を見つけて欲しい。まちに新鮮な視線を促せることが本研究の推しポイントだ。

－このテーマに行き着いた経緯

「駐車場に付くこの建築物は何だろう、なぜここにあるのだろう」というのが始まり。後にこれが「屋敷神」と呼ばれると知った時の喜びは今も覚えている。

SECTION2：卒業設計

卒業設計の総評

宮城 今年は対象としたロケーションのエリアも様々で、それぞれプログラムも含め違いがあって面白かったし、逆に比較が難しかった。

早く形として出すことで、沢山の
ブラッシュアップのチャンスができる

一つ言えることとしては、設計や制作をするには形が出てくるのが遅すぎるということ。形が出てこないとわからないことがたくさんあるので、早い段階で形を出して、そこからもう一度プログラムやコンセプト、あるいは課題そのもののありようを考え直すプロセスが必要だったかもしれない。一度形を出すことで、それぞれの教員ごとに価値を置く場所が違ったり、指導の仕方も違ったり、色々なところからブラッシュアップしていくチャンスができると思います。

中島 3人それぞれ違っていたのですが、1人は当初から対象地がある程度決まっており、その中でどれくらいの構想力で地域を掴むのが課題だった。それ以外の2人は、対象地を決めるのに時間がかかった。というのも、卒業設計の前までは、自分と向き合わなくても解くべき課題は人が与えてくれるので、それをやっていれば良かったのですが、いざそれがなくなって素の自分と向き合った時に、意外と自分のことをしっかりと考えていなかった、とか、自分のことがわかってなかった、みたいなこと自体がわかってくる。それが卒業研究であり卒業設計なんだろうと思います。この卒業設計を通じて、自分が何に関心があるのかが見えてくる、そのプロセスそのものがとても大事だと思っています。最終的には3人とも自分を理解し、それぞれのいいところがうまく出だし、逆にあまり得意じゃないところもやっぱり見えてきたような感じもしました。そんな意味でとても良い経験になったんじゃないかなと思いました。

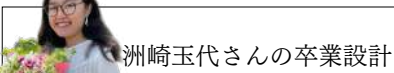
永野 それぞれ全然違う対象でしたが、いずれもすごく面白い敷地で、現代社会に対するメッセージ性の強い成果になった印象です。一方で具体的なスタディについては、宮城先生の仰る通り、早い段階から形を出すというところがあった上で、無駄案も含めた案のバリエーションをもっとつくる必要があると感じました。もう一つは、表現について、みんな美しいCGパースを描いてくれましたが、本来はみんなもっと手描きが上手い学生たちなのになという気持ち、演習を見ていただけに正直あります。デジタルで作ったものに最後手を加えて、個性を出す時間を取れなかったということでもあるとは思いますが。

青木 卒制というのはいい意味でも悪い意味でもその後の人生に残り続けるようなものだと感じています。卒制って、4年間学んだことと、これか

ら自分がやりたいこととの中間地点にあって、葛藤しながらも自分と向き合うの日々なのかなという感じがしています。また、お手伝いさんとかを呼んで、初めてマネージメントみたいなものを経験する時期でもあると思っていて、全体の計画自体のデザインを学ぶという意味でも大事なステージなのかなと。僕自身もそれに関しては卒制を通じて学びました。

ヒューマンスケールまでを
見続けられる研究室であってほしい

僕自身、都市工の卒業設計を見たのが初めてで、見る前にはもっとアーバンスケールの寄りの提案が多いのかなと思っていましたが、都市デザイン研究室の卒制はヒューマンスケールで、最終的な着地点として、人の視点やアクティビティとか、そんなところまで見据えているような気がして良かったです。これからもヒューマンスケールまでを見続けられる研究室あってほしいと思います。



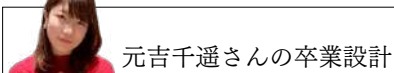
洲崎玉代さんの卒業設計

中島 現代の社会問題の解決と具体的な敷地の文脈デザインを両立させる彼女のずば抜けた構想力と、2年生のうちから現地のプロジェクトに参加していたからこそそのリアリティとが結合したとても良い卒制だったと思います。

宮城 中間発表の時、出口先生の「地元の人は何を望んでいるのか」という質問に対し、それをやっていたらあのエリアは駄目になるということをはっきり言っていたのが印象的です。それは彼女が3年間通った実感そのものですね。

青木 3年通った結論が“地元の人だけじゃダメになる”だったのは面白いですね。ただその場合、できた後にどんなプロセスでまちに入り込むかというところがとても大事なので、完成後の運営なども含めてデザインすることができたら街に本当に必要とされる施設になるのかなと思います。

永野 4つもの敷地にチャレンジしたパワーとスピード感が素晴らしかった。敷地の選び方自体があの小高という地形に対する回答。最後それが航空写真に置き換わっちゃったのは勿体なかったのですが、卒論会議の当初、流域全体における4つの区分を示す手描きのスケッチを出してくれたときに、すごく痺れたのが印象に残っています。



元吉千遥さんの卒業設計

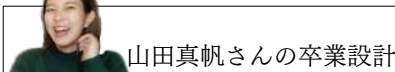
中島 小さな家具ほどのヒューマンスケールから学校の敷地までデザインモチーフを共通させながら提案した、彼女の力量が感じられる優れた作品

でした。ただ、あの地域の独特の屋敷構成はもっと提案の中で焦点を当てられたかも知れない。ぜひ、今後の課題として取り組んでほしいです。

永野 地域に入り込んで、暮らしを解像度高く理解し、丁寧に調べてくれたのが素晴らしかった。それだけに、例えばフィールドノートみたいなものを調査段階から作っておいてボードに載せられたら、提案の必然性や実現性をインパクトを持って伝えられたのではないかな。リサーチのフェーズを作品にできないか。そんな心持ちでリサーチ段階に取り組むことが大事だなと思いました。

青木 より詳細なリサーチを見た上で提案のプレゼンを聞くと、もっと良さに気付くことができたかなという気がします。もう一度提案までのプロセスを含めて、改めて聞いてみたいです。

宮城 形が出てくるのが遅かったので、締め切りまでにトライアルアンドエラーをあともう2回ぐらいやるとだいぶ違ったのではという印象があります。修士でももう少しやっていただけるといいかも。とても大事なテーマだと思います。



山田真帆さんの卒業設計

永野 食住近接という言葉がなかなかいいなと思いました。家の中での食は今までも考えられてきたけど、それを住戸の中に限らない色んなスケールで考えながら都市を計画するという発想自体はこれから非常に大事になってくると思います。

青木 テーマ的に特に大事な内外の関係性についての提案が見えてくるとより良かったと思います。施設の運営をするコミュニティービルダーなどの提案と一緒にあっても良さそうだなと思いました。

宮城 メディアとツールに対するリテラシーをこれから身につけさえすれば、彼女は大変可能性があるとは僕は感じています。そこが自分でも扱えるようになれば、どんどんアウトプットが出てくるのではないかと思います。

卒業設計に取り組む過程で
自分の本当にやりたいことが見えてくる

中島 最終的には都営住宅の敷地での野菜をテーマにした1つの集住の形に絞り込んだのですが、当初はもう少し商店街という都市的な集積の中での細やかな提案になるのかなと思っていました。何が自分が本当にやりたいことなのか、当初と最後は違っていてもよくて、卒制の過程の中でそれをはっきりしたのかもしれないですね。あの地域の持つ豊かな文脈については、都市デザインとして考えたいことが多くて、そういう敷地を選んでくれてこちらも大変勉強になりました。

小高環境観測所－複合被災地における持続可能な生活圏にむけて－

洲崎玉代 Tamayo SUSAKI

－設計の概要

対象地は、福島県南相馬市小高川流域。東日本大震災の複合被災地であり、もり・さと・まち・うみの4地域から構成されています。震災によって変化した物理的・社会的環境を観測し、観測に基づき環境に作用するための場所、小高環境観測所を提案しました。環境観測所が使われ続けることで、持続可能な生活圏が形成されることを目指しています。たくさん支えてくださった先生方、先輩方、地域の方々には心から感謝し、修士でも精進していきたいと思います。

－推しポイント

「環境観測所」という1つの考え方のもと、条件や規模などが異なる4敷地で、かたちと使われ方を提案した点。模型も頑張った！

－対象地選定の理由

大学生活を通してサークルやプロジェクト活動で関わってきた福島で、複合被災や復興、環境というテーマに取り組みきたかったため。



いつものもしも - 暮らしを分け合い、備えを設える -

元吉千遥 Chiharu MOTOYOSHI

－設計の概要

愛知県渥美半島先端の伊良湖に、「住民の日々の暮らしが、地震や津波の備えとなる」場を設計しました。災害大国の日本ですが、実際に備えようと思うと進まないのが現状です。備えずとも、いつもの暮らしが備えにつながる場を作りたいと考え、日常と災害時の双方を受け入れる、可変性のある空間を提案しました。調査のために何度か伊良湖を訪れ、地域の方々にお話を伺いましたが、まちの実情を見た上で、何が提案できるかを考えることが難しかったです。

－推しポイント

ヘルパーさんたちに頑張ってもらった模型に注目してほしいです！細かいところまで作り込んであるのでとてもお気に入りです。

－対象地選定の理由

自分に縁がある場所にしたいと思い、出身である愛知県で探していたときに、特徴的なまちなみと歴史をもつ伊良湖を見つけました。



生る（なる）、連なる ～“食”住近接の暮らしを培う～

山田真帆 Maho YAMADA

－設計の概要

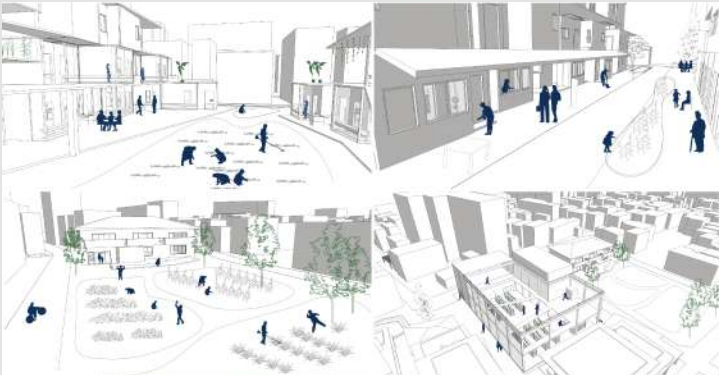
豊島区西巢鴨、旧中山道沿いの商店街とその後背地を対象に、都営住宅敷地に新たな“パブリックハウジング”を建てることを中心としてさまざまな人がつながりあうインクルーシブなまちを提案しました。かつてこの地域に根付いていた野菜づくりに注目し、食と生を見つめ直しながら暮らしていける土壌を培いたいと考えました。うまくいかないことばかりでバタバタでしたが、自分に足りない知識・スキルに気づけて、とても刺激的でした。

－推しポイント

ミクロな部分、特にどうやって野菜を育てるかを細かく考えたところです！模型の野菜たちも可愛い（ヘルパーの方へ大感謝）！！

－対象地選定の理由

大きな開発の予定もなければ活発な活動もなく、生業として商店街が廃れ住宅に建て替わっていく街に寂しさを覚えたから。



新・特任助教 青木公隆先生を知る

2023年1月より、都市デザイン研究室特任助教として青木公隆先生が着任された。今回は、実務と研究を往復しながら豊富な経験を積み重ねてきた彼の複雑な経歴を掘り下げていくとともに、2012年に独立し創業した設計

事務所「ARCO Architects」や特任助教着任の経緯についてのお話を通して、彼のことを知っていきたい。裏表紙企画と合わせ、今後彼と親交を深める手がかりとなれば幸いである。（聞き手：M1 平野真帆、M1 森屋友佑）



Theme.
生い立ちと経歴

01

昔からものづくりが大好きだった

建築に興味を持ったきっかけ

「本日はよろしくお願いたします。まずは経歴を追いながらお話できればと思いますが、最初に建築を志したのはいつだったのでしょうか？」

何となく考えていたのは小学校の時からです。僕の実家は茨城県守谷市の、綺麗に区画整理された住宅戸建て団地でした。今は全部開発が終わっていますが、当時はたくさん現場があって、大工さんたちが切った廃材を現場に置いていたんです。小学校二年生くらいの時に、その廃材がトラックに回収されて捨てられていくのを見てを勿体無いと思い、それをくださいと言って、色々作り始めたのがきっかけです。お年玉で電ノコを買ったりして、木を切るのが好きでした。

「行動力がすごいですね。最初に作った作品を覚えてますか？」

当時、手を叩く音に反応して扉が開き、お地藏さんが出てくるというおもちゃがあったんです。その音に反応する部品を取り出して、パチンコのようなものを作ったのが最初のものづくりだったと思います。当時はロボットコンテストという大会があって、ロボットを作るか、建築を作るかという道を考えていました。



別世界のものを組み合わせるような設計に憧れていた

学生時代の話

「学部は東京理科大で修士から東大の建築学専攻に進んでいますが、その理由は何でしょう？」

東大の千葉学先生の研究室は卒業生含めてとても優秀な学生が集まっていて、当時の意匠系で日本一の研究室であると思っていたので、そのような環境に身を置きたいと思いました。先生の作風も好きだし、日本設計出身でもあるので、今となってはつながるところもあったのかなと思います。

「修士課程の間に海外での職歴がありますが、これはどういうことですか？」

Dominique Perrault Architecte というパリの建築家の事務所でインターン生として働いていました。本を90度に開いた形の建物が4つ並んでいて、そのL字の建物が大きな中庭を囲んでいるセーヌ川沿いの図書館が有名です。そこで国際コンペの手伝いや図面・模型の作成などをしながら、休学もせず向うで修士論文を書き上げました。

「学生時代に思考力を養う上で、影響を受けた本などはありますか？」

建築の本ではないけれど、村上春樹の本をよく読んでいました。村上春樹の「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」という本にはとても影響を受けています。全く違う二人の主人公がいて物語がパラレルに進行していくんだけど、ある時に混



▲ NATIONAL LIBRARY OF FRANCE(Paris, France)
<https://www.perraultarchitecture.com/en/homepage/>

社会に出ても蓄積され続けるキャリア

最初の就職以降の話

「2008年の時に修論発表のために帰国し、最初の就職先はどのように決めましたか？」

千葉先生と、非常勤講師の古賀先生という方に大学院生の時に教わったことが影響として大きいです。お人柄や考えとの相性が良いのを感じて、ということですね。そこから日本設計に就職して、4年間働きました。

「しかしそこからのキャリアもかなり目まぐるしく変わっていますね。」

2012年に独立をし、ARCO Architects(アーコアーキテクト)という事務所を創業しました。それと同時に母校の理科大からお声がけがあり、そちらの教員として製図のサポートなどを同時にやり始め、3年続けました。その後2016年に東京藝術大学から話があり教育研究助手として働きましたが、このまま藝大にいてもその後のステップが見えないと思い、2016年に東大の出口先生のところ(新領域社会文化環境学専攻)に行き、実務と同時に博士論文を書くことにしたんです。だから博士論文は2022年まで6年かかりました(笑)。また、2016年から柏の葉アーバンデザインセンターの建築・都市ディレクターを担当したのは、UDCKという組織でまちづくりを実践する経験をしたと思ったのがきっかけで、約3年半続けました。そして今年から都市デザイン研究室の特任助教に着任しました。

「最初の就職以降も、実務と研究をかなりアクティブに行ったり来たりしているのが特徴ですね。また、進路を選ぶ際に「人」を見ていらっしゃるのも印象的で、個人的に共感しました。独立の経緯と特任助教着任の経緯に関しては、この後の章でお聞かせください。」

Theme.
設計事務所
ARCO Architects について

02

「タイミング」が偶然重なったことがきっかけ

事務所設立の経緯

「入社してわずか4年で独立されていますが、事務所創業に至った経緯を教えてください。」

千葉先生に、青木くんは本当に日本設計にずっといるの？と言われていたし、入社する前から実は独立を視野に入れていました。先生には最低7年はいた方がいいと言われていたんだけど、①ちょうど3年目の時に一級建築士を取ったこと、②4年目の時に高校時代の友人の親が開業することになりクリニックを設計できないかという依頼が入ったこと、③日本設計の現場もちょうど4年目で終わったこと、というタイミングが重なったんです。だから今しかないと思って独立を決意しました。

「事務所の名前の由来が気になります。」

その友人のお母さんの女医さんが僕のことをアーコと呼んでくれていて、そこから名前を取りました。クリニックは木造の平家で、会社では木造などやったことはなかったけれども信用してくれて、最初の一年間はずっとそれしかやっていませんでした。

ストックを生かし
まちを変えていく

現在のお仕事

「では、現在の事務所での主なお仕事について教えてください。」

今の大事な仕事は主に二つです。一つは北千住で、「せんつく」といういわば多機能多拠点施設を空き家リノベーションによってつくり、運営しています。普通建築の設計はクライアントから設計のお仕事をいただきますが、これは自分でお金を集めて投資をして、工事をして、自分で運営していくという自社事業としてやっているプロジェクトです。今「せんつく本店」に続いて「せんつく2」ができていますが、20年以内に千住地域に「10」まで作るという目標をいろんなところで話しています。駅から離れた空き家を使い、誰もやらないようなことを自分のお金でやってみる。それが都市をどう変えるポテンシャルがあるかというのをずっと探し続けています。これが現在の一番大事なプロジェクトです。

「いつか「せんつく」は都市デザイン研の皆さんにご案内したいと思っています。「せんつく本店」の方は一階に銀ジャケの専門店があって、「2」の方は炭火焼きのお店が入っています。すごく美味しい。その近くにはビールの醸造所付きの「さかつき Brewing」という店舗も設計しているから、自分の携わっている場所でハシゴができるんです。それが今とても幸せなことです。」

「それは最高ですね。今度その会をコンパ係として一緒に企画させてください！」



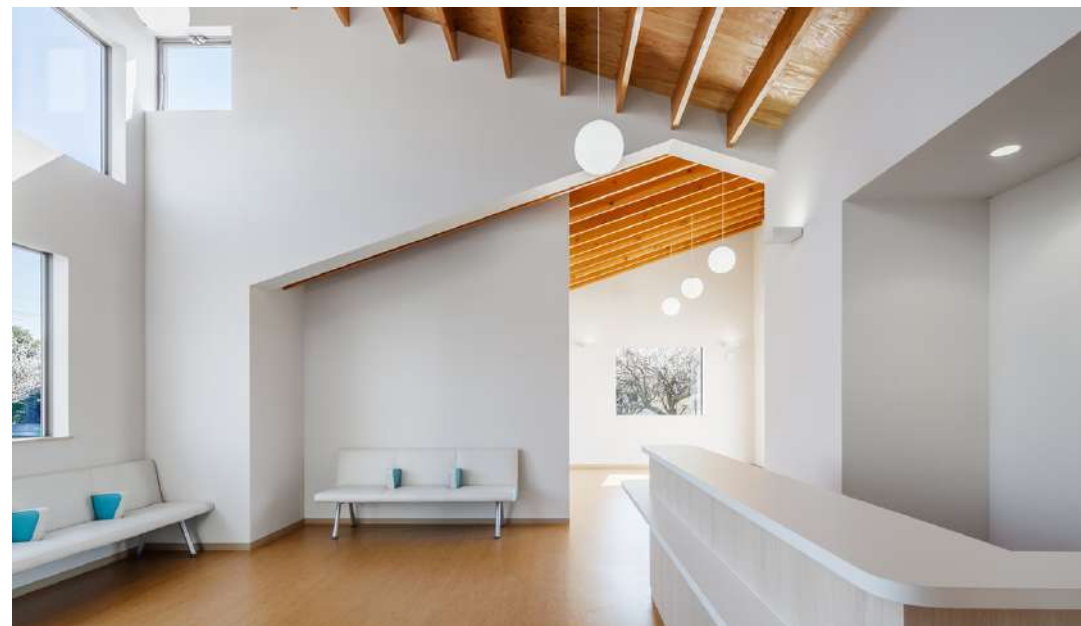
▲「せんつく2」1F子ども食堂を兼ねた炭火焼き店「オルト」(店舗 Facebook より)



▲住居から醸造所付き店舗に用途変更した「さかつき Brewing」(事務所 HP より)



▲「せんつく本店」1F子どもの駆け込み食堂を兼ねた国産銀鮭専門店「ウチワラベ」(店舗公式 Instagram より)



▲独立して最初に設計した「土浦の内科クリニック」(茨城県土浦市)。子供の泣かないクリニックとして評判になっている。(青木先生提供)

一では、もう一つ的主要なお仕事について教えてください。

もう一つは「大橋眼科」です。北千住の人に愛された古い建物の取り壊しが一度決定して、それを移築するという、クラウドファンディングによるプロジェクトです。昨年この建物を 3D スキャンして図面を全部復元して、今土地を探しています。同じ千住というまちの違う場所に再建するという、このまちにとって非常に重要なプロジェクトです。次は店舗として再生させる予定です。

モデルは台湾にある「宮原眼科」という眼科をリノベーションした建物なんだけど、それも大変素晴らしくて、中にスイーツ屋さんが入っていて世界中から観光客が訪れています。



▲美味しい台湾スイーツを求めて連日多くの観光客が訪れる「宮原眼科」(台湾、台中)
https://www.tabikobo.com/tabi-pocket/asia/taiwan/article6519.html

この「せんつく」「大橋眼科」の二つ以外の仕事としては、病院や飲食店、足立区の公共施設の設計が多いです。



▲大橋眼科(足立区北千住)
https://readyfor.jp/projects/ohashigankahttps://readyfor.jp/projects/ohashiganka

大事なのは、地域に入りすぎないこと

様々な立場を経験した後に思うこと



一お仕事で地域の人と話す機会も多いと思うのですが、つながりを増やす中で気をつけていることを教えてください。

まず、自分がどの立場で入っているかを意識するというのが大事。僕は建築家だったり、UDCKという行政と民間の中間のような立場だったり、藝大の時は丸の内に大学の人間として入ったり、色々な立場を経験しましたが、どの立場で入るかによって皆さんの接し方が全然違うんです。

一やはり地域の人の合意をとりながら慎重に進めていくのは実務だと特に大事なんですか？

合意も大事ではありますが、必ずしも最初から賛成してもらう必要はなくて、むしろ自分のやりたいことをすることがとても大事だと思います。

僕は昔、まちづくりや都市デザインをしたくて北

千住というまちに入った時、最初は縁もゆかりもなく誰も知り合いがいなかったの、とりあえず色々な人と知り合っていけば何かなるだろうと思って行動していたら、色々な利害関係に巻き込まれて凄く苦しくなった経験があります。逆に今は人と活動との程よい距離感を保ちながら活動することをとても大事にしています。当初は「せんつく」も工事の時に空き家から物音がすると言って警察を呼ばれてしまったり、地域の人からイベント開催を反対されたこともあり、駅から離れた築 75 年の古民家をリノベーションして店舗や複合施設にすることに賛成する人も少なかったです。だけど、挫けずに行動して形にしてから賛同してくれる人が出てきて、まちづくりファンドの組成に繋がったり、区長も応援してくれるようになりました。まちとの程よい距離感によって「せんつく」をつくることができたと思います。最初から賛同が得られなくても、自分が必要と思うことをまずやって、その後にきちんと街の人たちと話して理解してもらい、丁寧に運営する。この時間軸を常に大事にしています。全員が賛成するプロジェクトには慎重になった方がいいです。これは身を持って経験しているので、話すとしても長くなってしまいます。

一研究室プロジェクトに携わり地元の人の顔も見えるようになると、その人たちの想いを最優先に扱うべきだと感じてしまうこともあります、それに縛られすぎると「地域を俯瞰して見ている都市デザイナーだからその提案」はできないとも感じます。立場によって皆さんの接し方はどう違ったのか、今度ぜひ続きを聞かせてください。

Theme.

都市デザイン研究室と
青木先生

03

昔の人脈が結びついて 今がある



着任の経緯

一では、都市デザイン研究室の話題に移らせていただきます。まず特任助教のオファーが来た経緯について教えてください。

社会連携講座の担当の OPEN HOUSE の横瀬さんが日本設計の同じ部の後輩で、研究室の助教の永野先生も日本設計の後輩でした。横瀬さんと連絡をとっていて僕が博士をとった話になったときに、東大の都市デザイン研究室の社会連携講座で、博士を持っていた設計がわかるような人材を探しているという話もちょうどあったので、横瀬さんが紹介してくださって、そこから話がどんどん進みました。

一会社時代の人間関係が今につながったとは驚きです。最初話が来たときは何を思いましたか？

研究室の名前の「都市デザイン」って何なんだろうといつも考えています。僕はものの形を作るのが一番好きなので、ものづくりの延長で「都市デザイン」を考えてみたいと思っています。一方で無理にものを作らない都市デザインもあると思います。一つ思うのは、社会実験などのイベントをそのまま終わりにするのではなく、その先の地域の制度や仕組み、慣習に繋がっていくと、それはある種のものづくりに近い活動であり、都市デザインはその辺まで目指すべきと考えています。

一まさにPJ活動で目指したいことですが、活動期間が短くできるのが限られているのが難しい点です。学生やお部屋の第一印象はどうでしたか。

学生は全然話せていないので正直まだわからないです。部屋はうん、汚いですね…。最初ここが青木さんの机ですと紹介された時に、周りが散らかっていて、歓迎されていないのかなと思いました。(笑)あと自分の席に座って横を向くと扉の向こうの部屋に、博士論文で大変お世話になった出口先生がいらっしゃるのでとても緊張します。

一すみません…。お掃除がんばります。



▲青木先生のデスク。906号室で一番綺麗な領域である。(編集者撮影)



▲社会連携講座現地調査での永野先生(左)と青木先生(右)。会社時代に話したことはほぼなかったとのこと。

学生へのメッセージ

これからのデザ研を想い浮かべて

一研究室のメンバーとやってみたいことはありませんか？

任期の間に「せんつく3」ができるはず。それをみんなで考えてみたいです。空き家がないとできないですが、空き家が見つければ。3が1,2の近くにできればトライアングルができるので、それで回遊性が生まれたりすると面白いのかなと思っています。



▲北千住駅付近の「せんつく本店」「せんつく2」の位置関係。(せんつく HP 掲載のものに加筆): https://www.sentsuku.com

一それは絶対に楽しいですね。ぜひ参加させてください。都市デザイン研究室の学生に期待することは何ですか。

皆さんには主体的に自分でプロジェクトを動かす能力や気持ちが備わっていて欲しいなと思います。あとやっぱり何かやるってことは必ずリスクが伴うことだと思っていて、「せんつく」も近隣の責任とか投資するというリスクがあるので、主体的にかつリスクを背負いながら活動するというのを学生のうちに経験できると成長できると思います。学生は失敗を恐れずにどんどんチャレンジすべきだと思います。

一学生に聞いて欲しいことはあるでしょうか。

教員の中では実務経験が豊富な人間なので、実務に関することは色々聞いて欲しいと思います。実務ってやはり最先端だと思っていて、フィールドへ出て壁にぶち当たって解決するとか、その後に

研究対象になることもあるので、実務はいつまでも大事にしたいです。就活で実務を選択したから一生実務をやるとか、研究職を選択したからそのあとずっと研究をやることも大事である一方で、往復することで見えてくるのが沢山あるので、その辺に興味がある人には特に聞いて欲しいです。

一青木先生のように昔のご縁が思わぬところで繋がったようなお話を聞くと、後に活きるかもしれない小さな経験や出会いを大事にしていきたいと感じます。

幼少期のエピソードから研究と実務を往復した経歴、地域との関わり方など、「考え切る前にまず行動で示す」というクリエイティブでアクティブな側面が見られたインタビューだったと思います。近いうちにせんつくめぐりツアーを開催しましょう。これからよろしく願いたします！



▲905号室でのインタビューの様子。今月号のテーマカラーは事前にお伺いした青木先生の好きな色(裏面参照)としたが、偶然この日もテーマカラーの服を着用してくださり、誌面に統一感が出た。

青木先生に聞いた デザ研の学生から 10 の質問！

3 Q.心に残っている旅 ロンドンからマラケシュ

までの一ヶ月縦断の旅。

1 Q.愛読書を教えてください。

アンリ・ルフェーブルの
「都市への権利」。

※アンリ・ルフェーブル（著）、森本和夫（訳）
「都市への権利」、筑摩叢書、1968

まだきちんと理解できていませんが、

4 Q.メガネのこだわりポイントを教えてください！



メガネを本格的にし始めたのは最近です。

6 Q.リフレッシュ方法を教えてください ジムとサウナに行く。

（こちらも最近始めました）

7 Q.座右の銘を教えてください

「塵も積もれば山となる。」

9 Q.休日は何をして過ごしますか？

早朝読書して、その後は、公園か室内で
子供と一緒に終日遊び続ける。

10 Q.好きな味噌汁の具はなんですか？

大根。（この質問が一番悩みました）

2 Q.好きな建築とその理由



メスキータ。

拡張を繰り返し、キリストとイスラムの
2つの文化が混在した列柱の空間が圧巻です。

5 Q.好きな色をHEXコードで教えてください！

#5487AD

青系が好きです。

8 Q.好きな都市とその理由



▲ランブラス通り

好きすぎて3回訪れてます。

路地の密集する旧市街地や
ランブラス通りの活気が好きです。

ワルザードベルベ
ル人と写真撮影▶



▲ドミニクペロー研修生からの送別会

ヨーロッパ大陸最西端
「ロカ岬」

COLUMN

POSTSCRIPT

M2の先輩方とB4の後輩たちが、どれだけ今後の都市の発展に貢献する功績を成し遂げたのかはこの座談会企画を読めばわかるだろう。熱心に取り組む姿をずっと見ていたからこそ、対象地に向けた各々の思いがこうして今後の都市を導く示唆に繋がれたことが誇らしく、また尊敬の念を抱く。私自身、皆が残してくれた偉大な論文と設計のレビューを通して都市への理解を深めよう。（M1 長谷川）

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



Workshop at the highschool

On 2/16 the Fujiyoshida PJ Team, hosted a WS where I introduced public spaces in Kraków. We enjoyed brainstorming with students on how to improve local life in their town through urban interventions! (D1 Basia)



対面ヌマベリスト会議

昨年からはまったヌマベリストPJの初の対面での話し合いを見南土地さんのおしゃれな事務所で行いました。オンラインでは不十分だった、共通認識や方向性の整理が進んだ良い議論となりました。（M1 佐橋）

BOOK OF THE MONTH



造園植栽術

山本紀久
彰国社
2012

推薦者
M1 唐木田

生態学、植物学など「いきもの」に関する知識と、ランドスケープデザインの実践との間を橋渡しする貴重な一冊。植栽の計画から管理までの広範な知識・技術体系を学べることはもちろん、写真・絵や著者の手掛けた事例がどれも魅力的で心動かされる。